

延長戦を制した粘り
創部18年目の栄冠

ついに東海地区ナンバーワンの座をつかみ取った。11月2日、碧南臨海公園野球場で行われた県知事杯争奪リトルシニア東海連盟秋季大会の最終日。愛知、岐阜、三重、福井、石川、富山から出場した全42チームの頂点に立ったのが知多東浦だ。創部18年目で記念すべき初優勝を飾った。

今大会は初戦で知多を、3回戦で愛知衣浦を下すなど、地元チームとの戦いを制して4強に進出した知多東浦。三河安城との準決勝は鉄壁の守りで1-0で勝利し、大一番の決勝に駒を進めた。

豊田との決勝で先発したのは、サウスポールの水向快斗(はやと)。初回到味方の守りのミスで走者を背負うが、後続を高めの直球で空振り三振に仕留めた。2回は三者凡退で終えると、その裏、打線が自慢の機動力を発揮した。無死一、三塁とチャンスを迎えると、小出翔陽がスクイズ内野安打を決めて1点を先制。この時、相手の守りが乱れる間に再び1死一、三塁とし、続く青山大河も初球スクイズに成功して2点目を追加。さらに、続く遠渡真輝人が初球をセンター前へ運び、3点目を入れた。間髪を容れない速攻で、試合の主導権を握った。

しかし、相手も激戦を勝ち抜いてきた強敵だ。水向が4回に3連打を浴び2点を返されるなど、両チーム点取り合戦の展開になった。5-4の1点リードで迎えた最終7回表の守り、2番手投手の新美輝が2死までこぎつけたが、ワイルドピッチで同点に追い付かれてしまった。

それでも、気持ちちは切らさなかった。延長

と、スピニングが効いたボール、多彩な変化球が持ち味の期待の左腕だ。決勝では6イニングで4失点を喫し、「いつもならコースに投げ分けられるのに、イメージ通りのピッチングができませんでした」と反省したが、ピッチングでは最少失点に抑えるなど大事な場面では制球力を発揮した。

いずれは甲子園、プロ野球と夢は大きく膨らむが、今の目標は「長いイニングを投げられるスタミナをつけて、チームを引っ張っていきけるような投手になることだ」。

チームは東海地区の第1代表として来年3月の全国選抜大会に挑む。この冬、選手たちに体重5キロの増量を求める小田監督は「一つのプレーに意識を持ち、今日のように最後まで諦めない姿勢を貫いてほしい」と期待を込めた。

ひと回り大きくなったナインが、春も全力でダイヤモンドを駆け抜ける。

【愛知の中学生硬式野球・リトルシニア①】

東海地区を凌駕 電光石火の猛攻

知多東浦 リトルシニア

長8回裏の攻撃、盗塁や四球などで塁を埋め、最後は押し出し四球でサヨナラ勝ちを取った。小田智一監督(57)は「しぶといと言われる、最後まで諦めない、うちらしい野球ができた」と振り返った。個人表彰では、大会を通して好投した水向が最優秀選手賞に輝き、新美、遠渡、倉本能活、吉田恭がベス



「最後の1アウト、最後の1球まで諦めない」野球を選手に求める小田監督

トナインに選出された。

成熟する機動力野球 MVPに輝いた左腕エース

昨年10月、岐阜県での1年生大会で優勝したメンバーが中心だ。当時から足と小技を絡める機動力野球を持ち味とし、決勝の2回の電光石火の攻撃で発揮した。盗塁やバントは失敗が付き物だが、小田監督は「野球は失敗のスポーツ。その失敗をいかに抑えられるかが勝利の秘訣です。みんなです。カバールし合い、助け合うことが大切です」と言う。

1年生大会に続いてMVPに輝いた水向。四球を出さない安定したコントロール



昨年の1年生大会に続き、MVPに選ばれた水向。自慢の制球力にも磨きをかける



文◎由本 裕貴
写真◎伊藤 勝成